

ネットワークによる抗菌薬適正使用の推進

静岡県立静岡がんセンター感染症内科部長

倉井 華子

(聞き手 齊藤郁夫)

齊藤 ネットワークによる抗菌薬の適正使用ということでしょうか。

ネットワークという意味では今、どのようなかたちで行っているのでしょうか。

倉井 私は今、静岡がんセンターというところで病院の感染症診療と対策をしています。静岡県はもともと、東部、西部、中部に感染症の専門家がいる、感染症に携わる看護師さんも多くいます。病院間のネットワークは、勉強会や会議などですでにできていたのですが、抗菌薬をたくさん扱う開業医や市民への啓発活動が不十分と感じていました。そこをターゲットに、何かチームで活動できないかと考え、2017年3月に、私からいろいろな方に呼びかけをして、情報が足りないところに発信していくチームをつくろうと、12名のメンバーで活動を開始しています。

齊藤 先生がリーダーとなって、専門家の先生方に集まっていたのですか。どういった先生方が入られているのですか。

倉井 開業医を含む医師が東部と西部と中部、そして東京の国立国際医療研究センターAMRリファレンスセンターから合計5名が参加しています。ほかは薬剤師が5名、細菌検査の技師さんが1名、県庁からも1名参加いただきました。

齊藤 抗菌薬の使用の9割ぐらいが外来、開業医といわれていますが、医師会等への働きかけが重要ということですか。

倉井 そうですね。医師会の方への啓発活動は今までなかなかできていなかったもので、こうした方へ声を届けること、そして感染症の診療をサポートすることが大事だと考えています。

齊藤 医師会での勉強会、研修会などで、専門家の先生方がお話しするのですか。

倉井 静岡県の医師会の会報誌に掲載したり、講演会を2017年にさせていただきました。その下にある郡・市医師会には、半分以上の医師会に対して、会報または講演会というかたちで情報

提供をしました。

齊藤 何か先生方の反応はありましたか。

倉井 抗菌薬についての情報提供は、今まで製薬会社を通してしかなかったという意見、抗菌薬を使いすぎないということはわかっているのだけれども、使うのであれば、どのような使い方が一番いいのかという情報が欲しい、困った症例について簡単に相談できる窓口が欲しいという声をいただいています。

齊藤 厚生労働省から手引きが出ていますね。これは皆さんご存じですか。

倉井 今回、私たちはすべての医師会にこの手引きのダイジェスト版を配布しました。

齊藤 第一歩として、皆さんが一度読んでみる、ということでしょうか。

倉井 はい。

齊藤 どちらかという手引きは、使わない方向を強く意識した、それが基本的な対策なのでしょうが、適正使用の中では使うべき人には使うということですね。その辺はどうでしょうか。

倉井 どういう使い方が適切なのかという声上がるので、私たちは2017年度、静岡の24の病院に協力いただいて、臨床で重要な菌の感受性の率をまとめました。その情報に基づいて、市中のコモンな感染症、肺炎、尿路感染症、蜂窩織炎などに、どのような抗菌薬が適切かを示す「抗菌薬外来使用の

手引き」というものを作成しました。

齊藤 今おっしゃっていただいたように、地域のAMRの状況などを把握して、それに基づいて地域の中での適正使用を意識されているのですね。

倉井 そうですね。

齊藤 非常に重要なポイントですね。教科書を見ると、日本全国の情報はたぶんあると思うのですが、地域のことはなかなか伝わってきませんね。

倉井 いろいろな教科書もあるのですが、入院患者さんをセッティングしたものが多く、外来での経口抗菌薬に限ったものの情報が少ないです。そうした資料を提供したいと思っていました。

齊藤 それが2018年9月に発表された。これは県外の開業医が見ることは可能なのでしょうか。

倉井 静岡県ホームページ(<https://www.pref.shizuoka.jp/kousei/ko-420a/amr.html>)からこの手引きを誰でも見ることができます。

齊藤 静岡県の情報で行っていますが、ほかの地域でも欲しいですね。

倉井 もしご要りな方はいつでも見て、自由に使っていただければと思います。

齊藤 そういう活動の中で、開業医からの相談もしやすくしようということでしょうか。

倉井 実際、忙しい中にも感染症疾患の情報を得たいという声も上がりま

した。例えば輸入感染症や耐性菌に関して困ったときに相談できる窓口、システムを、来年度をめどに作成しています。

齊藤 一方、薬をもらう患者さん、あるいは市民への情報提供はどうされていますか。

倉井 それが一番難しいのですが、2017年は新聞の地方紙を含めて5回掲載しました。また、ラジオやタウン誌も重要な発信源です。2017年は市民のゆるキャライベントの中で抗菌薬・感染症の啓発ブースを設け、耐性菌や感染対策抗菌薬適正使用について知っていただく機会をつくるなどしました。

齊藤 非常に重要な仕事をされていますが、ボランティアになっていますね。

倉井 そうですね。今は有志でさせていただきますので、臨床の合間を縫ってこうした活動をしています。

齊藤 ただ、なかなか時間も限られていますので、何かサポートできるようなシステムが欲しいですね。

倉井 幸い2018年から行政の活動としても取り組みができるようになりました。いろいろな地域の先生方、看護師さん、調剤薬局の薬剤師さんなど少しずつ協力者を増やしているところです。

齊藤 先ほど医師会の講演会の話がありましたが、こういったことはテーマになりにくいですが、製薬会社がサポートしている部分もあるのですか。

倉井 医師会の勉強会では時々、製薬会社の方のサポートをいただくこと



もあります。医師会自体が開催する勉強会もありますし、そこは特にこだわりなくさせていただいています。

齊藤 今は静岡県ですが、ほかの県でも、こういったことが広がっていくことが望ましいですね。

倉井 最初は小さく始める。手を広げると限りないので、できる限り少な

い力で多くの人を動かせることを考えていかないと、つぶれてしまいます。

齊藤 最初によく計画を練って行うということですね。

倉井 そうですね。よく計画を練ることが大事だと思っています。

齊藤 どうもありがとうございました。